

読書

江戸時代から明治初期の美濃・飛騨で活躍した学者・文化人を調べるうえで、必ず手にとることになるのが伊藤信著「濃飛文教史」である。

刊行されたのは一九三七(昭和十二年)年。同じ著者の「美濃文教史要」

県図書館に行こう

こんな情報 が待っている

(一九二〇〇〇大正九年刊)を大幅に増補し、十八年を経て完成したものである。広辞苑の編さんで有名な国語学者・新村出が序文を寄せている。

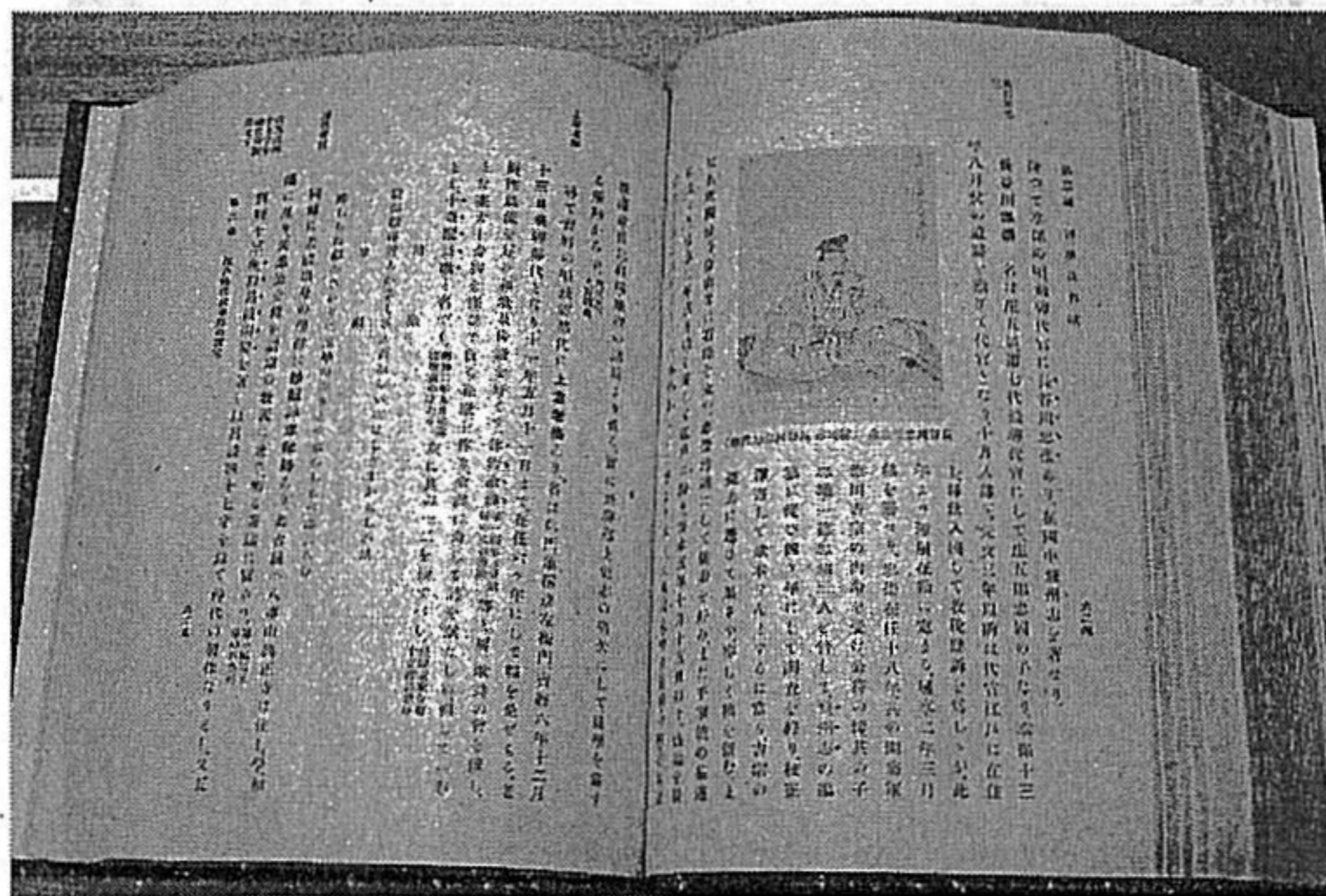
内容は、「美濃文教史要」の主題でもあった漢学と漢詩文についてが最

も詳しい。近世以前の状況を概観した後、近世から明治初期までを創始期、興隆期、衰微期の三期にわけ、各地域・藩の文教や、それを担った人物の事績を記している。

続いて、石門心学(江戸中期に石田梅岩が始めた

郷土学芸史の必携書

濃飛文教史



郷土学芸史の必携書「濃飛文教史」

沼悠斎といった洋学者に至るまで、索引に記載されている人名は六百人を超える。また、肖像や書

画の掲載も多い。著者の伊藤信は、郷土史と漢学の研究者。一八八七(明治二十)年、旧海津町(現海津市)生まれ。岐阜師範学校を卒業後、県内各地の中学や高等女学校で教壇に立ち、大垣市立図書館長なども歴任。また、県史蹟名勝天然記念物調査会委員、大垣市文化財審議会委員も務め、郷土研究の指導的存在だった。

ライフワークしながら梁川星巖を研究し、「梁川星巖全集」刊行に携わる一方、「梁川星巖伝」「大垣市史」「宝曆治水」「濃飛偉人伝」「岐阜県治水史」など共著書も多い。自身、竹東の号をもつ漢詩人でもあった。宝曆治水と薩摩義士の顕彰においても大きな足跡を残している。一九五七(昭和三十一年)十二月、七十一歳で没した。

BOOK REVIEW